

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 福井 康貴

本論文「近現代日本の大卒労働市場に関する社会学的研究—選抜メカニズムに着目して」の目的は、企業による大卒予定求職者の選抜について、諸制度と関連させながら通史的に検討することにある。選抜する側と選抜される側の「情報の非対称性」と選抜を実施する場である労働市場での「埋め込み」の論理を、本論文の主たる理論枠組みとして設定した。議論されるテーマは大きく3つある。1つには大卒者を採用するために企業がとった選抜手法の展開、2つには大卒採用に関連する諸制度の変容、そして、3つにはそれら諸制度の生成・変容に影響を及ぼしたであろう要因の探求、である。分析に用いた主な資料は、1897年に創刊された『実業之日本』、明治期から昭和初期にかけての就職に関連した諸雑誌・書籍、戦後においては文部科学省が発行する『厚生補導』（継続後誌は『大学と学生』）、1968年に創刊された『就職ジャーナル』、さらに、戦前・戦後の文部省や内務省（厚生省）、文部科学省によって作成された政府統計データである。

本論文は7章から構成される。第1章では、選抜のメカニズムを明らかにするために諸制度の変容を通時的に検討する本研究が、現代社会における大卒労働市場を考察することにも通じる意義を記した。第2章では、明治期から大正期において、紹介者を介した企業採用が実施されており、そこでは弟子/同郷/同窓といった同類的ネットワークが活用されていたことを示した。しかし、戦間期になると、紹介者を求めることをよしとしない風潮が現れ、企業独自の人物試験が実施されるようになった（第3章）。第4章では、戦間期において企業と求職学生を取り巻く制度として、学校推薦制、新卒一括定期採用、六社協定について議論した。

第5章では、戦後、学校推薦制から自由応募制へと変容した様子と、就職協定の展開を検討した。第6章では、就職情報誌に掲載された1960年代からの約30年間の就職面接に関する記事を用いて、企業側が求職学生の資質をいかにはかっていたかを明らかにした。ここでは、志望動機や自己PRを通した自己分析が強調されることの思惑が指摘され、社風や相性という言葉によって採用にいたる判断理由をあいまいにする巧妙さがあった、とする。最後の7章では、これまでの議論をまとめて、採用する側が求職者についての情報を不完全にしか持ち得ないことへの対処が試みられてきたし、これまで選抜方法が追加され変化しつつも今なおその試みは継続していることを明らかにした。

本論文は、これまでの社会学的研究の中で十分議論されてこなかった大学生と産業界との就職選抜のメカニズムについて、労働市場と就職に関連する諸制度の変容に着目し、資料を丹念に収集・分析して歴史的に描き出したという点で大きな貢献である。本委員会では慎重に審査した結果、博士（社会学）の学位を授与するにふさわしいものと判断した。